

宮 の 前 遺 跡

1991

滋賀県坂田郡

近江町教育委員会

序

近江町は、豊かな自然環境に恵まれ、その肥沃な土壌の上に今日まで発展して参りました。この度報告いたします「宮の前遺跡」は中世の寺院跡として周知されてきましたが、今回の調査によってその実態が明らかになりました。

「宮の前遺跡」をはじめ先人の残した数多くの諸遺跡は、近江町の歴史・文化を理解する上で欠くことのできない公共の財産です。これらの貴重な文化財を後世に伝えていくことは現代に生きる我々の責務といえます。

この報告が地域史研究や埋蔵文化財保護への理解と認識を深めるためにも幾分でも寄与することができれば幸いです。

末筆になりましたが、この調査に御協力いただきました関係諸機関に厚く御礼申し上げます。

平成3年3月

近江町教育委員会

教育長 木田源三郎

例　　言

1. 本書は、滋賀県坂田郡近江町内における長者墓地川改修事業に伴う埋蔵文化財（宮の前遺跡）の発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は平成2年度に実施した。
3. 調査は滋賀県の依頼により、近江町教育委員会が実施した。調査の体制は下記の通りである。

調査主体　近江町教育委員会　教育長　木田源三郎

調査事務局　近江町教育委員会　社会教育課　課長　須戸茂樹

　　係長　世森增信

　　主任　宮崎幹也

調査補助員　南 孝雄（現・京都市埋蔵文化財研究所）、

　　中川治美（中京大学学生）、橋本和恵（滋賀大学学生）

整理作業員　広瀬清左エ門、村岡勝次、北居憲二、近藤喜美子、吉居靖子、

　　小原八重子

4. 本書をまとめるにあたって、下記の方々から指導、助言を得た。記して厚く感謝の意を表する次第である。

　　江谷 寛、古野四郎、柏瀬宏昭、浜口和弘、大沼芳幸、岩橋隆浩（順不同、敬称略）

5. 本書で使用した方位は新平面直角座標系VIによった。また標高はTP（東京湾平均海面高度）を用いた。

6. 本書の執筆・編集は宮崎幹也がおこなった。

目 次

第1章 調査にいたる経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	3
第3章 調査の結果	5
第4章 出土した遺物	11
第5章 ま と め	12

挿 図 目 次

第1図 調査地位置図	1
第2図 宮の前遺跡位置図	2
第3図 周辺地籍復原図	3
第4図 調査地位置図	4
第5図 調査トレンチ遺構図	6
第6図 SK 0 1遺構詳細図	7
第7図 区画溝詳細図	8
第8図 遺物実測図	10

図版目次

- 図版1 (上) 宮の前遺跡近景
(下) 長老墓地川旧景
- 図版2 (上) 発掘作業風景
(下) 発掘作業風景
- 図版3 (上) 第2トレンチ全景(南西より)
(下) 第2トレンチ全景(北東より)
- 図版4 (上) 第2トレンチ全景(南西より)
(下) SK01(南西より)
- 図版5 (上) SD02(北より)
(下) 柱穴群(南西より)
- 図版6 (上) SD05・06(東より)
(下) SD04・11(北より)
- 図版7 (上) SD09(北より)
(下) SD01(南より)
- 図版8 (上) SK03(北東より)
(下) SK03(東より)
- 図版9 (上) SD08(南より)
(下) 第2トレンチ全景(東より)

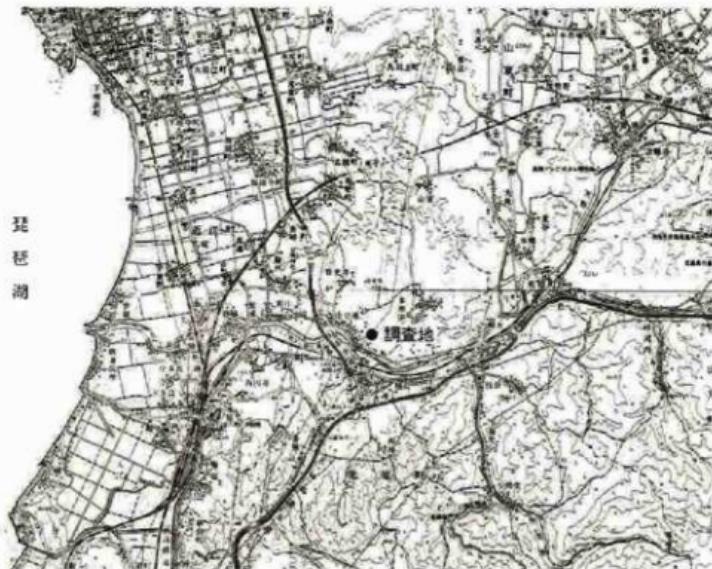
第1章 調査にいたる経過

滋賀県坂田郡近江町能登懸には、周知の遺跡として集落の東側に宮の前遺跡が所在している。同遺跡は平安時代の寺院関連遺跡として周知されており、周知範囲内の畠地を中心として、遺物の散布が認められている。しかしながら、これまでに実施してきた試掘調査からは、具体的な遺構が発見されておらず、同遺跡の実態については全く不明であった。

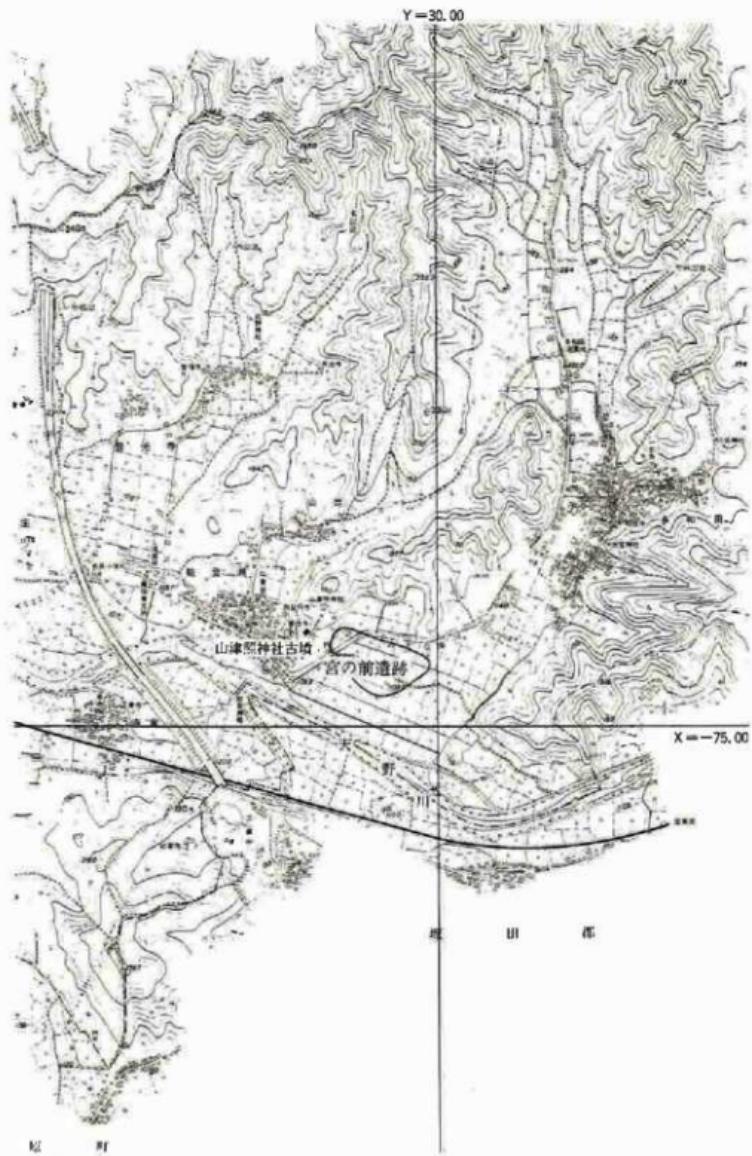
今般、滋賀県土木部による長老墓地川の改修事業が実施されるはこびとなり、河川幅の拡幅工事によって同遺跡の地下遺構への影響が予測されたため、発掘調査を実施し、記録保存を図った。

調査は滋賀県教育委員会の依頼により、近江町教育委員会が実施した。現地調査は平成2年6月4日より6月14日までの期間で実施し、平成3年3月30日まで整理調査を実施した。

また、宮の前遺跡では平成2年度末までに3次に及ぶ発掘調査が実施されており、当該調査は第2次調査にあたる。



第1図 調査地位図 (S S 10万分の1縮図)



第2図 宮の前道跡位置図

第2章 遺跡の位置と環境

宮の前遺跡は、滋賀県坂田郡近江町能登瀬に所在する。同遺跡は当町の南東部に位置し、長浜市より伸びる横山丘陵の最南端部と一級河川「天野川」に挟まれて立地する。遺跡の北側には、6世紀の前方後円墳「山津照神社古墳」が隣接している。

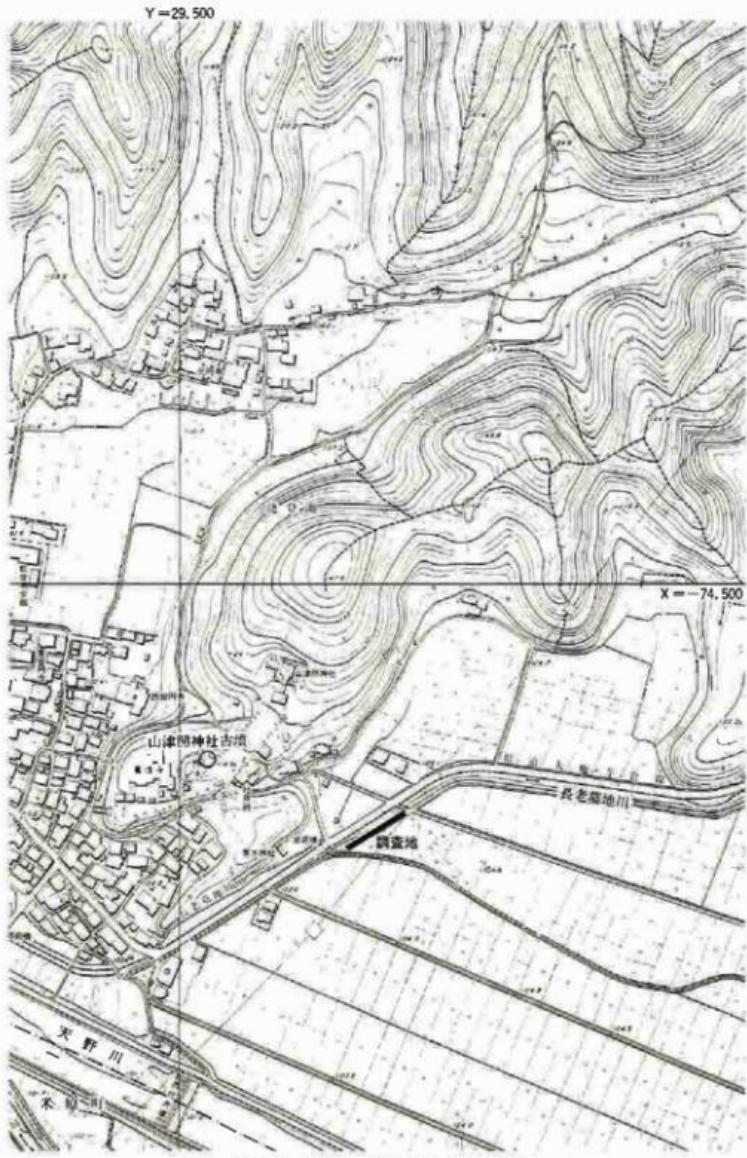
山津照神社古墳は、明治15年の延喜式内社「山津照神社」移転工事に際し、新設の参道箇所より発見された古墳である。丘陵の鞍部に立地する同古墳は、前方部・後円部とともに約5m程度の高さを測り、バチ形に開く前方部をもつ。古墳発見時の詳細については、同神社に保管される。「古墳伝記及口牌流伝取調上申書写」に記載されている。これによると内部主体は横穴式石室で、石室長7.5m・玄室幅2.7mを測る。石室の奥壁には屋根状の造構が付設されている。石室内部からは鏡・三輪玉・鉄刀・鐵塊・馬具・冠帽・須恵器が出土し、古墳周縁部からは円筒埴輪と朝顔形埴輪が出土している。古墳の築造年代は、出土遺物から6世紀前半と推定され、湖北町四郷崎古墳に後出する横穴式石室導入期の古墳と理解されている。

宮の前遺跡の名前は、山津照神社の元宮（現在の青木神社位置）正面に拡がることからつけられており、畠地を中心として平安時代後期から鎌倉時代におよぶ時期の遺物散布が認められる。周辺の旧環境については、彦根市立図書館蔵の『善性寺古絵図』に記載が知られ、養生寺・定応寺・雲好庵の3つの寺名が認められる。このことから、宮の前遺跡は平安時代後期以降の寺院関係遺跡と理解されている。

当該地である坂田郡近江町登瀬の農地は、大正8年から昭和9年にかけて大規模な耕地整理が実施されており、旧地形および旧地割を大規模に変貌させている。このため現存する水田地割から遺跡の所在を復元することは、極めて困難なことである。



第3図 周辺地籍復原図 (1919年頃)



第4図 調査地位図 (S=1:5,000)

第3章 調査の結果

当該調査（宮の前遺跡第2次調査）に先行して、隣接地では県営ほ場整備に関連した宮の前遺跡の第1次調査が実施されており、両調査における検出遺構には共通するものが多いため、本報告書の中で同時に説明するものとする。両調査トレンチの位置関係は2～4mの距離を保ってほぼ平行しており、第1トレンチ（第1次調査）が南東側、第2トレンチ（第2次調査）が北西側にあたる。両トレンチから出土した遺構は、溝・土壙・柱穴等である。以下に各遺構の詳細を述べる。

SD 0 1

第2トレンチの西端部で検出した溝。幅40cm～55cm・深さ30cm規模を測る。遺構の主軸はN23°Eを示す。本調査で検出した溝状遺構の内、方位に規格制をもった遺構が存在するが、このうちSD 0 1は最西端に位置する。

SD 0 2

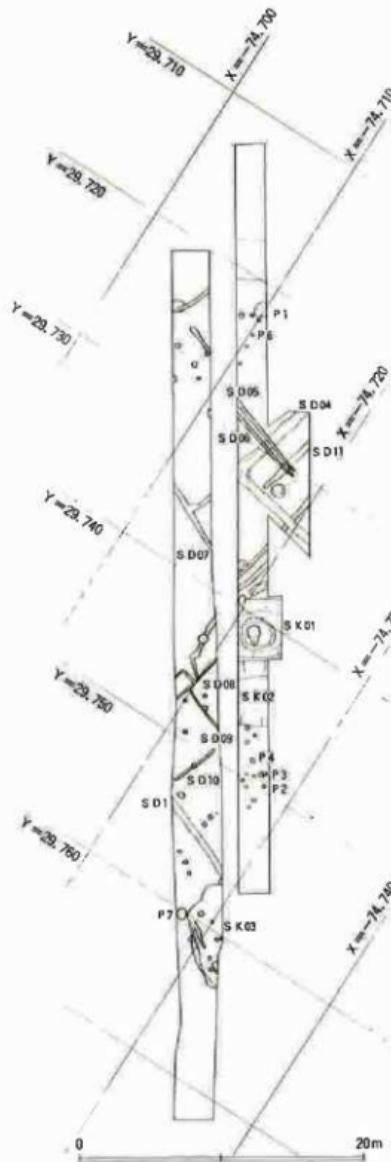
第1トレンチの中央部に東西方向に伸びる2本の平行した溝が存在する。南側の溝がSD 0 2、北側の溝がSD 0 3である。SD 0 2は幅35cm～40cm・深さ15cmを測る。遺構の主軸はN80°Wを示す。遺構の西端は幾分北側に屈折しており、不定形に蛇行した後、第2トレンチ内へと続き、別の溝SD 0 8に続く。

SD 0 3

先のSD 0 2の北側に平行する溝。幅20cm～40cm・深さ20cmを測る。遺構の主軸はSD 0 2と同様にN80°Wを示すが、SD 0 2よりも直線的な伸びを示す。SD 0 3の西延長部は、第2トレンチ内に確認することができない。

SD 0 4

SD 0 3の東端部上から掘り込まれた溝で、L字形に屈折している。幅40cm～90cm・深さ20cmを測る。遺構の主軸は西半分がN12°Eを示し、東半部がN80°Wを示す。第1トレンチの調査では、この遺構の全容を追及すべく調査範囲を拡張している。



第5図 調査トレンチ遺構図

SD 05

SD 04の東半部上から掘り込まれた二状の溝が存在する。このうち東側の溝がSD 05、西側の溝がSD 06である。SDは幅15cm～20cm・深さ15cmを測る。遺構の断面形状はU字形を呈しており、その主軸は西半部がN13°Eを示している。北側に隣接する第2トレンチ内では直接継続する要素の遺構は無い。

SD 06

SD 05の西隣に平行する溝。幅15cm～20cm・深さ15cmを測る。SD 05同様に幅15cm～20cmを測る。遺構の断面形状はU字形を呈しており、その主軸は西半部がN13°Eを示している。北側に隣接する第2トレンチには、遺構は延長しない。

SD 07

第2トレンチの中央部に位置する溝。幅30cm～40cm・深さ20cmを測る。主軸はN28°Eを示している。SD 07の主軸の傾きは、先に示した溝の主軸方位と異なり、東傾した様相を呈する。またSD 07の中程には、第1トレンチのSD 04に統くと想定される溝が接続しているが、こちらの幅は約45cmを測る程度で、SD 04ほど大きなものでは無い。

SD 08

第2トレンチの中央部に位置する溝。幅15cm～25cm・深さ20cmを測る。主軸はN13°Eを示している。中程から南方に向けてSD 09が伸び、SD 08の西側延長は第1トレンチ

の土壤SK01に統く。

SD09

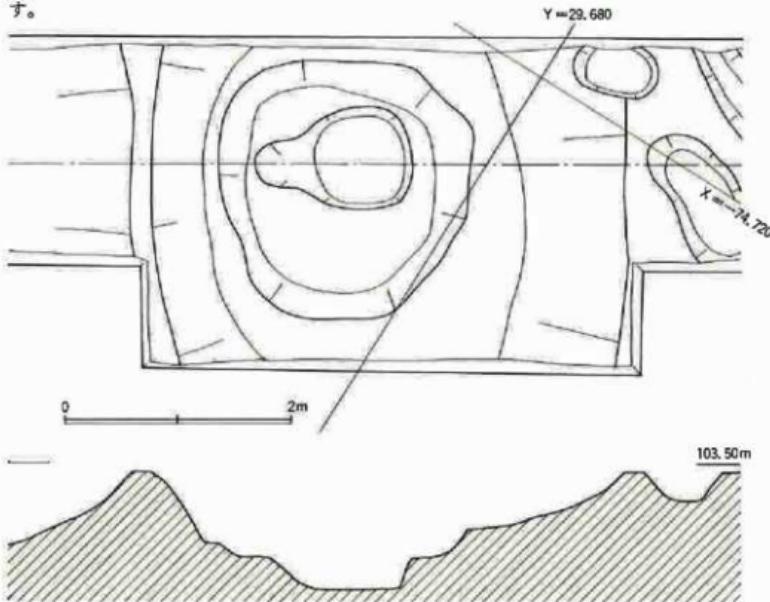
第2トレンチSD08より南側に位置する溝。幅15cm~20cm・深さ20cmを測る。主軸はN21'Eを示している。SD09の南側は、西部に隣接するSD10と調査地外方で接することが予測される。

SD10

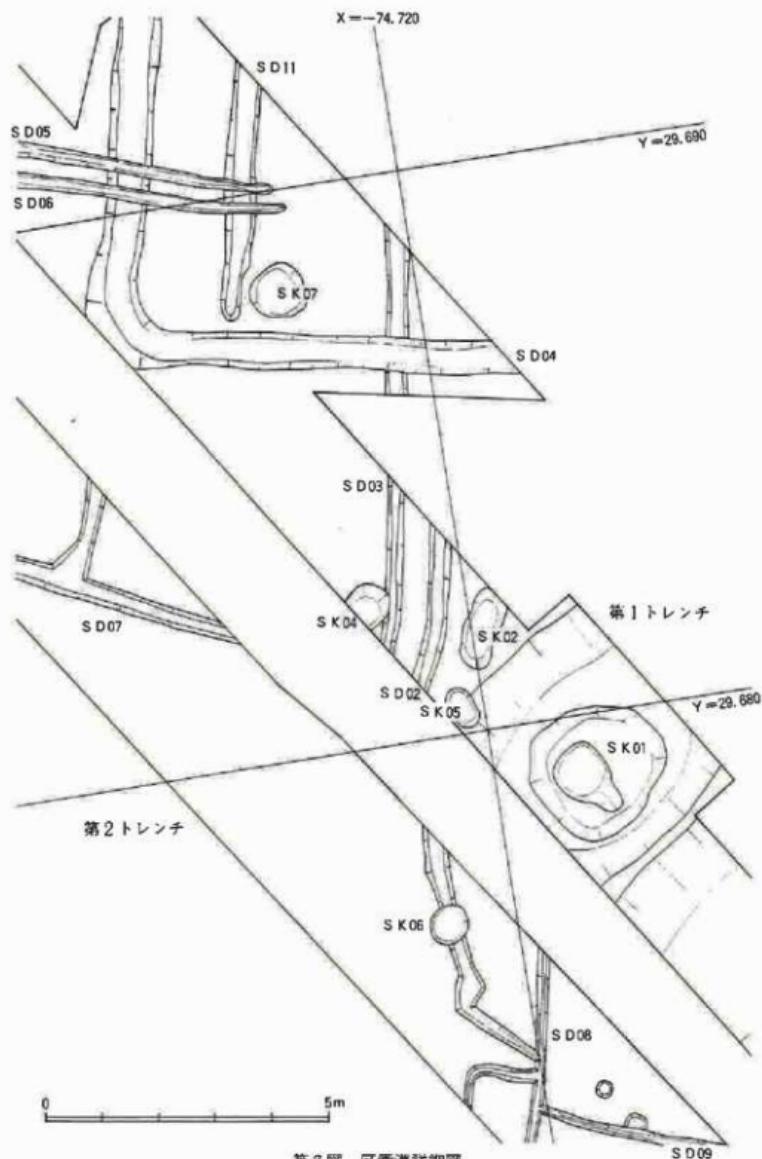
SD01の北端とSD09の南端を結ぶ遺構であり、幅10cm~20cm・深さ15cmを測る。主軸はN69'Wを示している。南東側に隣接する第1トレンチ内では区割りの溝は存在せず、建物を構成する柱穴群が認められる。

SD11

L字形の溝SD04の内側に平行する幅60cm・深さ15cmの溝である。主軸はN79'Wを示す。



第6図 SK01遺構詳細図



第7図 区画溝詳細図

第1トレンチの中央南寄りに、幅約4mの溝状遺構と幅約4m50cmの溝状遺構が検出され、当初は規模の大きな溝が並列するものと想定された。しかしながら、調査が進むにつれて東側の溝状遺構については、基底部のラインが閉塞し、さらに下層より一辺2m30cm四方の土壌が発見されたため、溝とは異なる遺構として判断するに至った。

完掘された遺構は、約40cm四方の基底部を伴い、廃棄された井戸とも判断される。

SK02

さきのSK01に隣接するもう一つの溝状遺構もまた、第2トレンチの検出遺構面上に関連したものが発見されず、SK01同様に土壌状の遺構となる公算が高い。

SK03

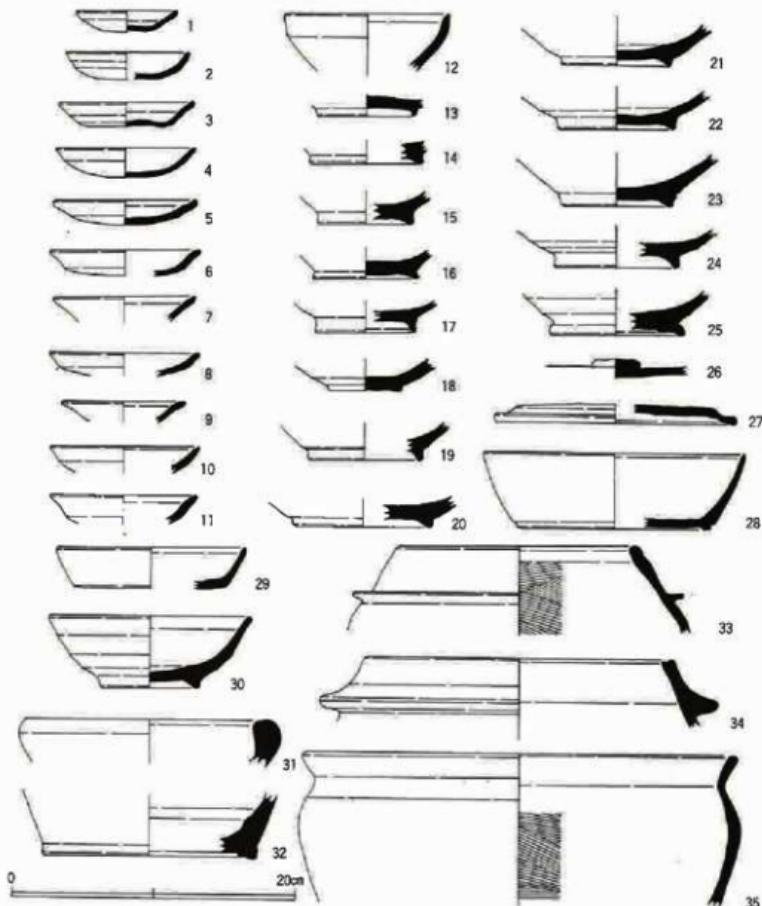
第2トレンチの南端部において、最大幅7m20cmを測る遺構が確認された。堅穴住居の平面形に類似したこの遺構は、深さ15cm前後と浅いが、柱穴や壁溝等の施設に不明な点が多く、堅穴住居と決定づけることはできない。

以上が、第1トレンチおよび第2トレンチにおいて検出した遺構の概要である。これらの遺構のうちで最も注目されるのは、区画溝の発見である。第7図に掲載したものは、主軸方位を約10度東傾させて調査区の中央部を占地する区画溝の詳細図である。

同図では、左側が北方を示した形となっており、遺構の集中地区の中では、L字溝SD04によって区画された箇所が存在し、その西方には井戸と思われる土壌(SK01)や、大形の土壌(SK02)が所在している。また、同時に確認された柱穴群も、これらの区画割の中で掘立柱建物等の建物遺構からは建物平面規模を特定できるものは無い。

区画溝は規模に多少の差があるものの、全体に小形の溝で構成されており、区画範囲が狭いことを特徴としている。また区画溝の存在する遺構面には地形上の起伏がほとんどみとめられず、区画単位の標高差は無い。調査地の周囲には試掘調査の際に大溝(堀状遺構)が確認されており、ここで検出された区画溝は、大区画内の小区割を構成することが理解され、建物の周囲を巡る区画溝と、建物等の機能・性格を分離する区画溝が併合しているものと考えられる。

また主軸方位の異なった溝については、SD01とSD05の重複関係にみられるよう、東傾約10度の遺構よりも後出するものが多い。



P1(3), P2(18), P4(27~29), P5(26), P7(31, 34, 35), SK01(2, 5, 22, 24, 25, 30), SD01(6, 7, 14, 32),
SD03(1, 4), 第2トレンチ包含層(8~13, 15~17, 19~21, 23, 33)

第8図 遺物実測図

第4章 出土した遺物

さきの検出遺構同様に、出土遺物についても第1次調査区（第1トレンチ）と第2次調査区（第2トレンチ）には、共通制が高く認められるため、ここでは合わせた形で報告を行う。遺物を出土した箇所は、土壤・区画溝・柱穴群と各トレンチ包含層である。各々出土した単位ごとに以下説明を加える。

まず井戸としての機能が予測されるSK01からは、土師皿（2・5）、山茶碗（22・24・25・30）が出土した。土師皿は共に小皿であるが、（2）には二段ナデ調整が認められる。また山茶碗の高台部には、断面形状が多種認められ、多時期に及ぶ遺物の混在が認められる。

統いて区画溝からの遺物は、SD01とSD03に認められる。SD01からは、土師皿（6・7）、須恵器（14）、灰釉陶器（32）が出土した。土師皿は共に口縁部を外反させたものである。またSD03からは、土師皿（1・4）が出土した。SD01・SD03共に性格や年代を明らかにする資料は存在しない。

掘立柱建物を構成すると考えられる柱穴からは多様な遺物が出土している。P1からは二段ナデ調整の土師皿（3）、P2からは陶器の椀（18）、P4からは須恵器の杯（28・29）と蓋（27）、P5からは須恵器の蓋（27）、P7からは土師器の鉢（31）・瓦質土器の羽釜（34）・須恵器の大鉢（35）などである。

この他に第2トレンチの遺物包含層より、土師皿（8・9）、瓦質土器の皿（10）と羽釜（33）、陶器の皿（11・13）と天目茶碗（12）、須恵器の椀（15・19）と鉢（23）、灰釉陶器の椀（16・17）、山茶碗（20・21）などが出土した。

出土した遺物のうち年代観の古いものは須恵器である。蓋を伴う杯（28）と伴わない杯（29）があり、扁平な宝珠つまみを持つ天井部の水平な蓋（26・27）とのセットと高台を持つ大形の鉢（35）は、出土した山茶碗のうち高台部の安定した古い形式のものと共通した年代か或いはこれに先行した年代のものとなろう。また、土師器の皿は小形品（小皿）が多く、手法差の顕著な大形品（大皿）が無いために傾向が安定していないが、一部に二段ナデ調整の技法が認められ、12世紀後半代の傾向と判断される。これは出土した山茶碗のうち、高台部の構成が粗雑化するものと共通した年代となろう。

瓦質土器の羽釜（33・34）には、口縁部の立ち上がりの大きいもの（33）と小さいもの（34）があり、鉢部の退化した傾向が認められる。こうした瓦質土器の湖北地域での出土量は、県下南部に比較して激減する。

出土した遺物は、平安時代後期から鎌倉時代にいたる12世紀後半から13世紀前半を中心としており、年代の古いものが混在した形で遺構内に包含されていたことになる。

第5章 まとめ

長老墓地川改修工事に関連した宮の前遺跡第2次調査の結果については、以上に述べてきたとおりである。当該遺跡地は、丘陵の南裾部に位置するが、長老墓地川の存在によって丘陵から離隔した感を与えている。しかしながら、第3図に示したように遺跡の存在していた当時の旧河道は、同遺跡の南側を取り巻くように流れていたことが知られ、今回の調査で検出した遺構も全体に南側に向けて緩やかな傾斜を保っている。また検出された区画溝の基底部も南方もしくは西方に低く傾斜している。

検出した遺構は10度前後東傾する南北方位の区画溝を中心としており、出土遺物の年代観から12世紀後半から13世紀に至る遺構群と判断される。溝で区画された内部には、建物・井戸戸等の施設が確認されたが、さらにこれらを取り囲む大区画の大溝（堀状遺構）の存在が先行する試掘調査結果から推測される。北東側から流れる長老墓地川の旧河川から引き込まれた水を利用して大溝の区画が成立したと考えられ、その一部の流路を基礎として現在の長老墓地川の付替がおこなわれたと推測される。大溝による区画割は、当初予測していた宮の前遺跡の範囲より広く、局部的なまとまりがあり、第1次調査と第2次調査を実施した遺跡西部の範囲と、第3次調査の実施された遺跡東部の範囲は別個の大区画と理解できる。また、遺跡周知範囲の北東隣にも、かつて遺物散布が知られた畠地があり、3番目の区画の存在も予測される。これらの区画を『善性寺古絵図』に表れる養生寺・定応寺・雲好庵等に断定することはできないが、一つの候補としては掲げられよう。

今回の調査では、これまで不明であった宮の前遺跡の具体的な遺構を明らかにし、その存続年代の一部を明らかにすることができた。これらの資料が今後の地域史解明の一助となれば幸いである。

文末になったが、調査に際して御協力をいただいた関係者の皆様に謝意を表する次第である。

図 版



宮の前遺跡近景



長老墓地川旧景



発掘作業風景



発掘作業風景



第2トレンチ全景（南西より）



第2トレンチ全景（北東より）



第2トレンチ全景 (南西より)



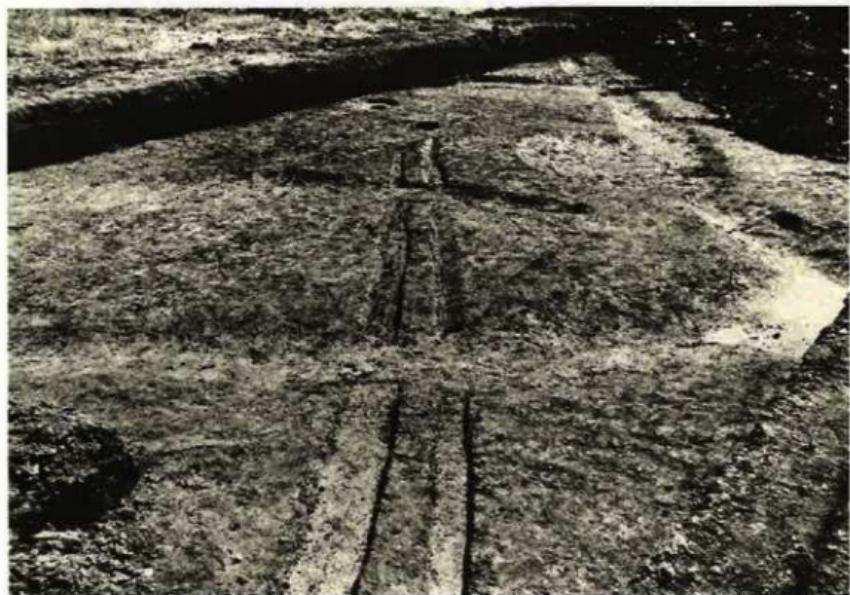
S K31 (南西より)



S D02 (北より)



柱穴群 (南西より)



S D05・06 (東より)



S D04・11 (北より)



S D09 (北より)



S D01 (南より)



S K03 (北東より)



S K03 (東より)



S D08 (南より)



第2トレンチ全景 (東より)

近江町文化財調査報告書第7集

宮の前遺跡

1991年 3月

編集 滋賀県坂田郡近江町教育委員会

印刷 有限会社 真陽社